

底びき網における資源管理システムの高度化（令和 6 年度）

寺門弘悦・福井克也・金岩 稔¹

1. 目的

本研究では、漁業法改正による TAC 対象魚種の拡大を見据えて、複数魚種を同時に漁獲する沖合底びき網漁業において、統計モデル解析による多魚種の分布予測情報を漁業者に提供し、資源管理と収益性向上を両立できる操業への転換を支援する。また、機動的禁漁区による漁業管理システム e-MPA を運用し、底魚資源の回復を図るとともに、本漁業が自らの操業結果をフィードバックした資源管理を自主的に実施していく責任ある漁業への転換を引き続き支援する。本研究は、島根県、国立大学法人三重大学大学院生物資源学研究科（以下、三重大学とする）、島根県機船底曳網漁業連合会が共同で実施した。

2. 方法

(1) 高度漁業情報の収集

浜田漁港を根拠地とする沖合底びき網漁船（以下、沖底とする）に対し高度漁業情報を得るため、タブレット端末上の専用アプリへのデータ入力を依頼した。収集する情報は、1 曳網毎の操業位置、魚種別漁獲箱数、航跡情報であった。

(2) 高度漁業情報のデータフィルタリング

共同研究機関である三重大学が、高度漁業情報における入力ミスによるエラーデータを検出するためのデータフィルタリング方法を検討した。

(3) 漁業管理システム e-MPA の運用

共同研究機関である三重大学が開発した底びき網漁業管理システム e-MPA の運用により、沖底のアカムツ小型魚の漁獲状況に応じた機動的禁漁区を設置し、全船が管理ルールに則って操業した。

また、e-MPA による禁漁区の代替漁場を効率良く探索するための支援として、リアルタイムに収集した高度漁業情報を基に、ランダムフォレストの分類モデルによる底魚類の分布予測と専用アプリを通じた漁業者への予測結果の提供を行う。底魚類分布予測システムを運用した。対象魚種は、アカムツ、ムシガレイ、ソウハチ、ヤナギムシガレイ、キダイ、アナゴ、ケンサキイカ、スルメイカ、アンコウ類、マダイ、マトウダイ、マフグ、ヒラメ、ヤリイカおよびマアジの 15 魚種である。

(4) 資源動向の把握

e-MPA によるアカムツ小型魚の保護効果を検証するため、浜田市場のアカムツ銘柄別漁獲量データ等を基にコホート解析を行い、沖底操業海域におけるアカムツ資源の動向を把握した。

3. 結果

(1) データフィルタリング

2010（平成 22）～2018（平成 30）年漁期までのデータを用いて、一般化線形モデルにより、漁業者が入力した漁獲量と市場への水揚量の関係を魚種別に見たところ、マフグとアカムツ以外で正の相関がみられ、エラーデータ検出への利用可能性が示された。

(2) 漁業管理システム e-MPA の運用

2024（令和 6）年 3 月 1 日～5 月 31 日の間で約 10 日間ごとに禁漁区を設定した。期間中に延べ 43 小小漁区の禁漁区（1 小小漁区は 6×5 km）を設置し、アカムツ小型魚の保護に努めた。

(3) 資源動向の把握

推定されたアカムツ資源の動向を図 1 に示す。e-MPA の取組期間中、2018 年漁期まではアカムツ資源は増加傾向を示し、特に 1 歳魚の資源を取り控えて増やすことができた。しかし、2019（令和元）年漁期に 1 歳魚の資源量は半減した。以降は減少傾向にあり、今後の資源動向を注視する必要がある。

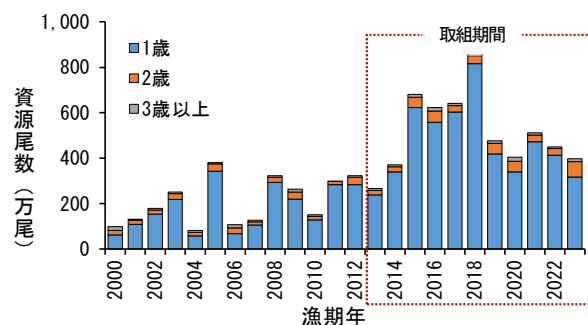


図 1 各漁期年の後半（1 月～5 月）の沖底操業海域におけるアカムツの推定資源尾数の動向

4. 成果

沖底漁期を通じて、沖底漁業者が底魚類の分布予測結果を随時閲覧できる体制を維持し、効率的な漁場探索を支援した。また、アカムツの資源状況について、2024 年 8 月に開催された沖合底びき網漁業意見交換会にて報告した。

¹ 国立大学法人三重大学大学院生物資源学研究科